

最近のイギリス近代史研究について

——ひとつの史学史的考察——

松浦高嶺

I 戦後イギリス史研究の回顧と展望

まずはじめに、最近発表されたデーヴィッド・カナダインの注目すべき論文⁽¹⁾を参照しながら、戦後イギリス史研究の今日までの歩みを回顧し、今後を展望してみよう。

1 歴史学研究の黄金時代

およそ一九四〇年代の末から一九七〇年代はじめまでの四半世紀は、イギリスの歴史学研究における黄金時代であったといえることができる。たとえばイギリスの大学における歴史学専攻教員の人数をみると、第一次世界大戦前にはわずか二百名、第二次大戦前でも三百九十名たらずであったのに対し、一九六〇年代はじめには千三百名、一九七

〇年代はじめには千七百名にまで、飛躍的に増加している。それがひとつには第二次大戦後のイギリスの大学の数の急激な増加に起因することはいうまでもない。イングラントとウェールズに限っても、university (総合大学)の数は一九三九年以前の十二から今日では一挙に三倍にまで増えているのである。しかもそれらの大学における文科系の学生の専攻学科別をみると、歴史と古典(ギリシア・ローマの歴史・文学・哲学)が他の文学・語学・哲学・政治学・経済学などを圧倒して、つねに全体の過半を占めていたようである⁽²⁾。

そのような好条件のもとで、多くの傑出した歴史学者たちによってイギリス史研究の成果が第二次大戦後相次いで刊行された。それらの中でもとくに注目されるのは、世界に先駆けたイギリスの近代化過程——およそ十六・十九世

紀——におけるいくつかの決定的な変革の画期の研究であつて、それは以下の著作に代表されるように、いずれも革命的な変革と進歩の歴史としてイギリス近代を捉えるものであった。

まずエルトンは、トマス・クロムウェルを直接の推進者とする一五三〇年代のテューダー行政革命によって、イングランドははやくも近代国民国家としての基礎を確立したとみた。⁽³⁾

またクリストファー・ヒルは、イギリスが一六四〇年代に世界史上最初のブルジョア革命を達成した、と一貫して主張している。⁽⁴⁾

オックスフォード大学からアメリカのプリンストン大学へ移ったストーンはヒルのようなマルクス主義的なブルジョア革命論はとらないが、イギリス近代化の決定的画期としてのイギリス革命の原因論を「先行条件」(一五二九—一六二九の百年間)、「促進要因」(一六二九—一六三九の十年間)、「引き金」(一六四〇—四二の二年間)の大・中・小三通りの射程に分けて追究した。⁽⁵⁾

さらにプラムは十八世紀行政革命論となえ、ディーン⁽⁶⁾やマサイアスらは世界で最初の産業革命、最初の産業国家の誕生を、経済成長論の立場から分析した。⁽⁷⁾

そして最後に、マクドナー⁽⁸⁾やパリスらによって、いわゆる

相対的低下が、歴史学の中でもとりわけイギリス史研究のもつ吸引力を減少させた。

今や歴史学を教える側も学ぶ側も、既成の歴史学への信頼を失ってしまったように見受けられる。今日、イギリスの大学の教師は、学生がいかに明敏で、いかに学問的情熱に燃えていても、歴史学、とりわけイギリス史の研究のために大学に残るように勧めることはごく稀にしかないといわれる。十年後には、現在の状況がそのまま続けば、四十歳以下の若手イギリス史研究者はイギリスの大学に見当らなくなるだろう、というのもあるが誇張ではなさそうである。

3 「目的論的歪曲」と「修正主義的曖昧」

戦後歴史学の黄金時代の活力にやや衰えがみえはじめたのと並行して、イギリス近代化過程をめぐるそれまでの諸大家の概括化に異議をとなえ、矛盾や不整合を指摘してきびしい批判を試みる、いわゆる修正主義者の著作が目立つようになってきた。

既成の歴史学の担い手とこれら新人たちとの対立は、後者が前者を「目的論的歪曲」と批判するのに対して、前者は後者を「修正主義的曖昧」と反批判する、という形で現在も進行中である。⁽⁹⁾ 修正主義者たちが既成学説の批判、さ

る十九世紀行政革命論争が繰り広げられた。

カナダインのいうところのイギリス歴史学の黄金時代とは、ちょうど筆者自身が大学卒業前後にイギリス史研究を志してからおよそ二十数年間の、研究・教育生活における主要部分に該当する。当時のわれわれは敗戦後の日本という立場から、とりわけ上にあげた諸著作に触発されてイギリス史に立ちむかい、学生諸君とともに学んだのであった。

2 ドラスティックな収縮

黄金時代のイギリス史研究の発展・拡大のいわば逆説的な帰結として、過去十年間のイギリスでは研究者の人数においても、イギリス史研究に寄せる信頼度においても、まさにドラスティックな収縮が生じてしまった。ますます多くのアカデミックな歴史家がますます多くのアカデミックな歴史書を著わしたにもかかわらず、読者の数はそれに反比例してますます減少してしまったのである。

依然として大胆な仮説の提示や斬新な構想の展開を試みる歴史家も少数はいるが、昨今の大方の傾向としては専門分化、そして個別研究成果の膨大な積み重ねの重圧に圧倒されて、知的創造における臆病さ、そしてペダンティックな好古趣味への悲しむべき後退がみられるようになった。そしてまた、世界においてイギリスが占める地位の比重の

らには破壊にもつばら力を注ぎ、それに取って代るべき新学説の積極的提示を必ずしも試みないことが、一般読者にとつての専門歴史書の魅力の減少の大きな要因ともなっているのである。

修正主義者たちはさきに紹介したエルトン以下による、一連のイギリス近代化論をどのように批判しているのか。それぞれのいわばさわりの部分を引用してみよう。それらによっても、修正主義者たちに共通の歴史観の特色をうかがい知ることができる筈である。

デーヴィッド・スターキーのテューダー行政革命論批判

——「エルトンはちょうど十八世紀の理神論者が宇宙を観察したのと同じように、テューダー朝行政改革を捉えようとしたといえよう。すなわち、造物主ともいべきトマス・クロムウェルの秩序正しい創造物とみなしたのである。

これに取って代るべきものとしてわれわれが提示しているのは、すでに『神の死』を体験した二十世紀にふさわしいカオスの宇宙である。クロムウェルは造物主の座から引きおろされる。行政上の変化は長期的な計画の結果とは到底いえない。それはむしろ、きわめて複雑な状況の相互作用の帰結であった。⁽¹⁰⁾」

コンラッド・ラッセルの十七世紀イギリス革命論批判
——「ホイッグ史学からマルクス主義史学へ受け継がれて

きた不可避性の主張は、今や問い直されねばならない。ホイッグ史学もマルクス主義史学も十九世紀なれば、進歩の觀念が最も流行した時代の知的風土の産物である。チャールズ・ダーウィンこそはそのような知的風土の結果であると同時に、その原因でもあった。そこにおいては、歴史とはより悪いものからより良いものへと移行する、一種の不可避的諸段階とみなされる。その行き着く先は、ジェレミー・ベンサムがいうところの『知識が完全をめざして急速な前進を遂げつつある現代』ということになるのである。ホイッグ史学とマルクス主義史学とに共通の信条は、不可避性こそは歴史の真理であるという確信、そして「十七世紀の内乱における」議党派は勝利したが故に進歩的であり、未来のために戦う党派であるという確信である」。

J・C・D・クラークのホイッグ史学・マルクス主義史学批判——「本著において論じられる修正主義の最も基本的な成果のひとつは、イングランドの過去を、国制上のであれ、経済上のであれ、ホイッグ的漸進主義変革、あるいはマルクス主義的変革の不可避的自己展開として捉えるような、目的論的歴史解釈を成り立ちがたくさせることである」。

なおクラークから「目的論的歪曲」と批判される側からは、彼の修正主義的歴史観は次のように要約される——

「クラークはみずから目的論と決定論の両者を拒否することとを大いに強調する。クラークによれば歴史には内在的なダイナミズムなどはなく、必然的なコースをたどるなどということはあり得ない。歴史のコースを決めるのは社会的・経済的発展の不可避的な力ではなく、政治の舞台における登場人物たちの間のきわめて偶発的な相互作用である」。

最後に、工業化の決定的画期としての産業革命に関しては、「イギリスの経済と社会の全体を深く広く改造した、という意味での真の産業革命はむしろ一八五〇～一八一四年に展開したというべきであろう」とか「マンチェスターを中心とするランカシャー一州の木綿工業という特殊ケースを以て産業革命を一般化するのには、歴史的現実というより神話にすぎない」というような批判ないしは修正論が提起されている。

II ラズレット著『われら失いし世界』

一九八六年五月にわが国でも川北稔氏らによって『われら失いし世界』という表題のもとに日本語訳が出版されたのは、一九八三年に刊行されたラズレット著 *The World We Have Lost* の第三版（増補改訂版）である。初版が刊行された一九六五年からこの第三版が出た一九八三年まで

の間には、これまで紹介してきたように、イギリスの歴史学界は大きく変貌を遂げたことになるのであるが、そのような変化は今日のイギリス社会史研究の一方の旗頭ともいうべきラズレットの著作にどのように反映しているのだろうか。初版と第三版との対比にも留意しながら、考察を進めてみよう。

ラズレットは元来、ロバート・フィルマー著『パトリアーカ』（一六八〇）やジョン・ロック著『政府二論』（一六九〇）など十七世紀イギリス政治思想史上の古典的名著について、すぐれたテキスト批判の業績を以て知られていた。そのようなオーソドックスな文献学者から社会史家への一大転換のきっかけとなったのは、まずノッティンガムシャーの一教区牧師がのこした教区民の姓名や、洗礼・結婚・埋葬の個別事例、あるいは聖餐式出席者の名前、さらには天候、穀物価格など、広範囲にわたる詳細な記録をもとに行なった十七世紀一教区社会復元の試みであった。この論文に続いて発表された本格的な著作が、一九六五年刊の本著である。

われら失いし世界、すなわち前工業化時代のイギリスに関するラズレットの社会史的研究の特色は、その内容に即して、第一に、理論的・論争的部分と、第二に、実証的な部分とに分けて、指摘することができよう。それらのうち

とくに注目すべき諸点を列挙すると、およそ以下の通りである。

1 理論的・論争的部分

(1) 歴史の決定的な転換点としての工業化——「資本主義が世界を変えた」式の考え方によれば、古代・封建・ブルジョアといった三段階時代区分法がとられるが、われら失いし世界と現にわれらの住む世界との間のいちじるしいコントラストを考慮に入れるならば、工業化こそが唯一・決定的な転換点である。

(2) 単一階級社会論——前工業化社会においては、ジェントリとノン・ジェントリとの間の境界線によって全人口がきわめて不均等な二つの部分に分かれていた。貴族・ジェントリは全人口のわずか二十分の一ないし二十五分の一にすぎなかったが、全国土の三分の一ないし二分の一を所有していた。そして彼らのみが権力をふるい、全国的規模での政治・経済・社会上のあらゆる決定に与っていた。

ノン・ジェントリすなわち労働大衆は相互にばらばらの存在で、いわばその一人一人が父親か親方の人格に「包摂」(subsume)されていた。そのような彼らには独立の人格としての相互の連帯などあり得ず、したがってひとつ

の階級を構成するとは到底いえなかった。かくして、前工業化社会は貴族・ジェントリのみから成る単一階級社会だったのである。⁽²⁶⁾

(3) 「イギリス革命」なる概念は抹殺されるべきである——「イギリス革命」という言い方は、イギリス国民の社会的・政治的圧制からの解放を想像させるが、十七世紀の内乱は決してそのようなものではなかった。元来、国民的・社会的革命という表現は二十世紀のレーニン主義革命家たちが志向した「ロシア革命」とか「中国革命」に適用されるべきものであって、誤解を招きやすい十七世紀「イギリス革命」というような概念は、すべからず葬り去られるべきである。⁽²⁷⁾

(4) これまでの「ナイーヴな社会史研究」に取って代るべきわれわれの「ソフィステイケートされた社会史研究」——歴史家は従来、複雑な社会構造や社会的因果関係の問題を、とるにたらぬわずかの統計を用いて、あてずっぽうに推論してきた。そのような乱暴きわまりない概括化やまったく説得力に乏しい思弁に満ちている既成の歴史学の否定の上にこそ、新たな社会史研究は構築されねばならない。⁽²⁸⁾

2 実証的部分

(1) 教区記録簿 (parish register) にもとづく十七世紀

なかったというのは、少なくともイングランドに関する限り思い違いである。⁽³³⁾

(6) われらが祖先についての思い違い（その五）——前工業化社会では生活条件の悪化にともなう結婚年齢の上昇や結婚の差し控えの当然の結果として、私生児出産数が増加したという思い違い。事実はまったく逆で、食料価格の高騰など生活条件の悪化が予想される時期には、結婚が差し控えられたのと同様に、婚前あるいは婚外妊娠も差し控えられたと推察される。性的逸脱に対する社会規制がそれだけ厳しかったともいえる。⁽³⁴⁾

(7) 前工業化社会における識字率（読み書き能力）——十六・十七世紀教会裁判所記録にもとづく個人の署名能力の階層別統計によれば、農民・奉公人・労働者の署名率はおおむね二十パーセント以下である。このことは彼らが階級的連帯を自覚し得なかった事実の有力な証拠とされる。⁽³⁵⁾

III 歴史学研究における作法について

1 ラズレット著はいかに増補改訂されたか

ラズレットの著書の特徴はおよそ以上のように要約することができよう。それならば、第三版で増補改訂されたのはどのような事柄だったのであろうか。

村落共同体の実態解明——たとえばケント州一教区の住民構成に関する牧師補の報告書（一六七六）からの引用によって、社会階層ハイアラキーの上にゆく程、世帯（家族の他に住み込みの奉公人なども含む）規模が大きいたことが示される。⁽²⁹⁾

(2) われらが祖先についての思い違い（その二）——前工業化社会の男女は現代人よりもいちじるしく早婚であったという思い違いが訂正される。ただし彼らの間では貴族・ジェントリの方が多少早婚であった。⁽³⁰⁾

(3) われらが祖先についての思い違い（その二）——すくなくともイギリスに関する限り（イタリアやロシアは別）、前工業化社会では大家族世帯（結婚していない一人以上の親戚を含む）や複合家族世帯（おたがいに親戚である二組以上の夫婦を含む）が一般的であったという思い違いが訂正される。事実は現代と同様、核家族世帯が圧倒的に多かったのである。⁽³¹⁾

(4) われらが祖先についての思い違い（その三）——前工業化社会は現代の発展途上国と同様に出生率・死亡率が非常に高かったという思い違いが訂正される。出生率が死亡率を下回ったことは一度もない。⁽³²⁾

(5) われらが祖先についての思い違い（その四）——前工業化社会では農民は飢えていて、餓死することも珍しく

それはまず第一には、ラズレットを中心とするケンブリッジ大学の「人口および社会構造の歴史研究グループ」による一九六五年の初版刊行以後におけるめざましい研究成果が少なからず取り入れられたという点である。それはさきに言及した各種の統計表の修正や追加においてとくに顕著であり、この点において第三版の内容は初版よりも大いに改善されたものとみてよからう。

ところが第二に指摘されるべき増補改訂部分は、率直に言って、むしろ改悪された部分とみなさざるを得ない。それはとくに歴史家クリストファー・ヒルに対する集中的かつ執拗な批判であって、それらはすべて第三版であらたに書き加えられたものである。

ラズレットはマルクス主義史家ヒルが一九四〇年の処女作『一六四〇年のイギリス革命』⁽³⁶⁾や、あるいは一九四九年刊行の『良き古き大義』と題するイギリス革命史料集の「序論」において積極的に展開したマルクス主義理論にきわめて忠実なブルジョア革命論から、一九六〇年代以降大幅な理論の後退を遂げたという事実を大げさに取り上げ、それをもっぱら皮肉っているのである。⁽³⁸⁾ラズレットをして悪意に満ちたともいえないような非難・攻撃をわざわざ書き加えさせた、直接の動機は何だったのであろうか。

それには大きく分けて二つの理由があったと考えられる。

第一は、マルクス主義歴史家であつて、しかもオックスフォード大学でも最も名誉あるポストのひとつであるペーリオル・カレッジの学寮長に選任されたクリストファー・ヒルの対する反感である。ラズレットの著書の中には何人かの現代歴史家の名があげられているが、わざわざその役職名まで付記しているのは、ペーリオル学寮長ヒルの場合のみである。

イギリスで最も著名なマルクス主義歴史家であり、一九五七年まではイギリス共産党員でもあったヒルが、一九六五年にペーリオルの学寮長に選ばれたのは、たしかに人々を驚かす予想外の人事であつたかもしれない。established leftとでもいおうか、マルクス主義者でありながら同時にエスタブリッシュメントの一翼を担うヒルの立場は、何よりも彼自身に、とりわけ一九六八年の「学生革命」に際しては並々ならぬ緊張と苦悩を強いたようであるが、ラズレットにとっては、この established left というヒルの立場が気に入らなかつたのではなからうか。⁽³⁹⁾

というのも、ラズレットの理解ではマルクス主義者とは革命主義者であり、マルクス主義者が十七世紀イギリス革命論を学問的に展開するのも、現代社会における革命主義者としての実践活動の一環とみなされたのであらう。そのような趣意から、マルクス主義者がペーリオルの学寮長に

以下の三項目にわたつていた。

第一に、口先だけで自己の研究成果を誇示すること。たとえばさきに紹介したように、これまでのナイーヴな社会史研究に対して、自分のソフィステイケートされた社会史研究である、といった具合にである。

第二に、自己採点は甘く、他者にはきわめて厳しい姿勢をとりながら、しかも学問上の正確度の欠如を自らの著書の中で暴露していること。その最も顕著な例として、ヒルはラズレットの十七世紀政治史に関する史実認識の誤りを指摘している。すなわち、一六四〇年十一月に召集されたいわゆる「長期議會」に先立つ「短期議會」とは、同年四月に召集されて一カ月たらずで解散されてしまつた議會を指す。このことはイギリス近代史家の間では十七世紀政治史の常識であるのに、ラズレットはこの「短期議會」が一六二八・二九年に召集されたものと思ひ違ひをして、初版ではそのように記述していた。⁽⁴¹⁾ヒルに指摘されたこともあつて、一九七一年の第二版では誤りの箇所を訂正したが、第三版ではその前後の一パラグラフ全文を削除してしまつた。⁽⁴³⁾不愉快な思ひ出を抹消しようとするかのように。

第三に、新しい歴史学は伝統的な歴史学の否定から始めなければならないと大言壮語するが、否定的評価の対象としてあげているこれまでの歴史研究、たとえばアンウィン

なることは許し難く思われたのであらうか。彼のヒル批判の文脈からは、どうしてもそのように受け取らざるを得ないのである。

次に第二の理由は、ラズレットの著書が一九六五年に刊行された時、ヒルがこれに対してきわめて手厳しい書評論文を書いたこと。この時の酷評に対する恨みを根に持つて第三版で仕返しをしたという印象を否定することはできないであらう。

ヒルの書評論文の中でラズレット批判は、大別して二つの項目にわたつていた。第一は、当然予想されたことではあるが、ラズレットの単一階級社会論に対するマルクス主義の立場からの反論である。ヒルによれば、もしもラズレットのようにあらかじめ想定されている結論に適合的な階級の定義を設定すれば、歴史上どの時代においても支配階級以外の階級は存在しないことになるだらう、と。そしてヒルはまた、工業化に先立つ三世紀間を特筆すべき社会変化に乏しい静的な、同質的な時代とみなし、十七世紀イギリス革命の革新性をまったく無視してしまふラズレットの歴史解釈を全面的に批判するのである。

しかしながら、ラズレットを傷つけ、彼の反感を買つたのは、以上の第一点よりも、第二の学問研究の作法をめぐるヒルの批判であつたように思われる。それはおよそ

やビンドフの著作を個別に直接自分で読み通した形跡はほとんど認められない。⁽⁴⁴⁾学問研究作法をめぐるヒルのラズレット批判はおよそ以上の通りであつた。

いずれにせよ、増補改訂版におけるラズレットのヒルに対する激しい反発と非難の真の動機を明らかにすることは不可能であり、そのこと自体さほど重要でもないが、学問研究者の作法をめぐる⁽⁴⁵⁾先輩の苦言に対して、ラズレットの対応は決して率直でも誠実でもなかつたといわざるを得ないであらう。

2 結びにかえて

最後に、これまで述べてきたことから三つほど問題点を指摘して、結論に代えたい。

まず第一には、歴史学研究の未来に関するカナダインのきわめて悲観的な展望について。強調されているのはイギリス歴史学界における過去の黄金時代と衰微しつつある現在とのコントラストであつて、わが国の歴史学界にもあい通ずる部分があるとはいへ、われわれには独自の回顧と展望があつて然るべきであらう。そもそもイギリスの大学の文科系の学生の専攻科目の中で歴史学が経済学や政治学を大幅に引き離して首位の座を占めていた時に、イギリスの歴史学は黄金時代を謳歌したのであるが、その結果は大学

卒業者の多くが実業界への進出を毛嫌いして、結局英国病を深刻化させてしまった。

わが国では事態はまったく逆で、これまで文科系の大学生の大半は就職に有利な実学を求めて、法・経・商・社会学部などに入学し、そこから巣立った人々によって今日の経済超大国日本が築き上げられてきた。等閑視され、虚学ないしは趣味の学問と目されたのが、たとえば文学であり歴史学であったが、高度文明化社会のもとの「非人間化」から人間を救い出し、自然と人間とのバランスを回復するために何よりも必要なのは人間学であり、その主要な部門としての歴史学であるといいたい。

第二には、「目的論的歪曲」対「修正主義的曖昧」について。そもそも目的論的歪曲とは、一定の理論(今日の視点)にもとづく事実の選択、解釈、さらには因果関連の究明を意図する知的作業に対する、批判者の側からの否定的な概念と解すべきであろう。それはわれわれの歴史学研究にとって不可欠の作業手順であると考えたい。もちろん理論の硬直化は教条主義を生む恐れがあり、それを避けるためにも修正主義者の異議申し立てには大いに耳を傾けるべきではあるが。

第三には、学問研究の作法について。ヒルのラズレットに対する手厳しい批判は、ひろくわれわれに対しても反省

をせざるものと受け止めたい。そもそも学問の世界では、若手研究者が自らの独創的な研究の成果によって先輩の学説を批判し論駁することは、むしろ積極的に歓迎すべきことである。しかしコマージュ・シャリズムが世の中にはびこると、学問研究者までまさしくヒルが指摘するように、口先だけで自己の研究成果を誇示しようとし、また時流に便乗して口先だけで他者の研究にけちをつけるようになりがちである。学問の作法が正しく守られることがなければ、学問的水準がいかに高そうにみえる研究であっても価値が半減すること、そしてそのような研究をいかに重ねても当人の品性の向上は期待できないことを、われわれはあらためて銘記しなければならない。

註

- (1) David Cannadine, "Viewpoint: British History; Past, Present—and Future?" *Past & Present*, No. 116 (August 1987). なお本論文におけるカナタインの問題提起を受け止め、ちまたの角度から論点をさらに拡大・深化させようとする三名の研究者(P. R. Coss, William Lamont & Neil Evans)の論文が、以下の表題で刊行された—"Debate: British History; Past, Present—and Future?" *Past & Present*, No. 119 (May 1988).

- (2) Ferdinand Zweig, *The Student in the Age of Anxiety; A Survey of Oxford and Manchester Students*, London,

1963, p. 3.

- (3) G. R. Elton, *The Tudor Revolution in Government: Administrative Changes in the Reign of Henry VIII*, Cambridge, 1953.
- (4) Christopher Hill, *The English Revolution 1640: Three Essays*, London, 1940; *The Century of Revolution, 1603-1714*, Edinburgh, 1961.
- (5) Lawrence Stone, *The Causes of the English Revolution, 1529-1642*, London, 1972.
- (6) J. H. Plumb, *The Growth of Political Stability in England, 1675-1725*, London, 1967.
- (7) Phyllis Deane, *The First Industrial Revolution*, Cambridge, 1965.
- (8) Peter Mathias, *The First Industrial Nation: An Economic History of Britain 1700-1914*, London, 1969.
- (9) Oliver MacDonagh, "Nineteenth-Century Revolution in Government: A Reappraisal," *Historical Journal*, Vol. 1, No. 1 (1958).
- (10) Henry Parris, "The Nineteenth-Century Revolution in Government: A Reappraisal Reappraised," *Historical Journal*, Vol. 3, No. 1 (1960).
- (11) 'teleological distortion' vs. 'revisionist obscurantism'—Cannadine, *op. cit.*, p. 170.
- (12) Christopher Coleman & David Starkey, eds., *Revolution Reassessed: Revisions in the History of Tudor Government and Administration*, Oxford, 1986, pp. 200

-201-

- (13) Conrad Russell, ed., *The Origins of the English Civil War*, London, 1973, p. 5 (Introduction by the editor).
- (14) J. C. D. Clark, *Revolution and Rebellion: State and Society in England in the Seventeenth and Eighteenth Centuries*, Cambridge, 1986, p. 164.
- (15) Joanna Innes, "Review Article: Jonathan Clark, *Social History and England's 'Ancien Régime'*," *Past & Present*, No. 115 (1987), p. 169.
- (16) A. E. Musson, *The Growth of British Industry*, London, 1978, pp. 150-151.
- (17) Michael Fores, "The Myth of a British Industrial Revolution," *History*, Vol. 66, No. 217 (1981), p. 183.
- (18) 川北稔・指昭博・山本正記『ラズレット われら失った世界——近代イギリス社会史』三聯書房、一九八六年。
- (19) Peter Laslett, *The World We Have Lost: Further Explored*, London, 1983. (以下「本著」Laslett, 3rd ed. 参照)
- (20) Laslett, *The World We Have Lost*, London, 1965. (以下「本著」Laslett, 1st ed. 参照)
- (21) Laslett, ed., *Patriarcha and Other Political Works of Sir Robert Filmer*, Oxford, 1949; John Locke, *Two Treatises of Government: A Critical Edition with an Introduction and Apparatus Criticus*, Cambridge, 1960.
- (22) Peter Laslett and John Harrison, "Clayworth and Congenoe," in H. E. Bell & R. L. Ollard, eds., *Historical*

- Essays, 1600-1750, Presented to David Ogg*, London, 1963.
- (33) 49ページの終りに「ロバート・ハムリンの著作は、この頃のイギリスの家族制度と家族の生活の歴史を研究する上で、*Comparative Studies in the Size and Structure of the Domestic Group over the Last Three Centuries in England, France, Serbia, Japan and Colonial North America, with Further Materials from Western Europe*, Cambridge, 1972; Laslett, *Family Life and Illicit Love in Earlier Generations: Essays in Historical Sociology*, Cambridge, 1977; Laslett, Karla Oosterveen & Richard M. Smith, eds., *Bastardy and Its Comparative History: Studies in the History of Illegitimacy and Marital Nonconformism in Britain, France, Germany, Sweden, North America, Jamaica and Japan*, London, 1980. #44, #45, #46の三冊は、ロバート・ハムリンの著作をまとめたものである。——Lloyd Bonfield, Richard M. Smith & Keith Wrightson, eds., *The World We Have Gained: Histories of Population and Social Structure: Essays presented to Peter Laslett on his Seventieth Birthday*, Oxford, 1986.
- (34) Laslett, 3rd ed., pp. 20-21 (原註三頁)°
- (35) Laslett, 3rd ed., p. 27 (原註四〇～四一頁)°
- (36) Laslett, 3rd ed., pp. 51-52 (原註四一～四二頁)°
- (37) Laslett, 3rd ed., p. 206 (原註一四二頁)°
- (38) Laslett, 3rd ed., p. 278 (原註一四三～一四四頁)°
- (39) Laslett, 3rd ed., p. 64 (原註六〇頁)°

- (40) Laslett, 3rd ed., p. 82 (原註一四四頁)°
- (41) Laslett, 3rd ed., p. 98 (原註一四四頁)°
- (42) Laslett, 3rd ed., p. 108 (原註一四四頁)°
- (43) Laslett, 3rd ed., pp. 128-129 (原註一四四頁)°
- (44) Laslett, 3rd ed., pp. 161-162 (原註一四四～一四五頁)°
- (45) Laslett, 3rd ed., p. 231 (原註一四九頁)°
- (46) Hill, *The English Revolution 1640: Three Essays*, London, 1940.
- (47) Hill & E. Dell, eds., *The Good Old Cause: The English Revolution of 1640-60: Its Causes, Course and Consequences*, London, 1949.
- (48) Laslett, 3rd ed., pp. 23, 183, 185, 186-187 (原註三三頁、三三頁、三三頁、三三頁～三四頁)°
- (49) 原註三三頁、三三頁、三三頁、三三頁を参照——Donald Pennington & Keith Thomas, eds., *Puritans and Revolutionaries: Essays in Seventeenth-Century History presented to Christopher Hill*, Oxford, 1978, pp. 1-21.
- (50) Hill, "Review Essay: *The World We Have Lost*, by Peter Laslett," *History and Theory*, Vol. 6, No. 1 (1967).
- (51) Laslett, 1st ed., p. 165——"When Charles I's Long Parliament met in 1640, no less than eleven years had elapsed since the last foregathering of Knights of the Shire and Burgesses for Parliamentary towns. No one, therefore, in that remarkable assembly, which was to lay down the general lines of the Anglo-Saxon model of

representative government, had taken a single parliamentary action for over ten years. The previous experience of 328 of the 547 members was confined to the few weeks of the Short Parliament of 1628-9, and 161 of the remainder were newcomers altogether."

- (52) Laslett, 2nd ed. (1971), p. 174——"Apart from the very brief life of the Short Parliament from April 13th to May 5th 1640, no less than eleven years had elapsed since the last foregathering of Knights of the Shire and Burgesses for Parliamentary towns when Charles I's Long Parliament met in November of that year. The previous experience of 167 of the 547 members of that remarkable assembly, which was to lay down the general lines of the Anglo-Saxon model of representative government, was confined to the three weeks of the Short Parliament: 161 of the remainder were newcomers altogether."

- (53) Laslett, 3rd ed., pp. 202-203 (原註一四一～一四二頁)°
- (54) George Unwin, *Studies in Economic History: Collected Papers of George Unwin, ed. by R. H. Tawney*, London, 1927; Stanley T. Bindoff, *Tudor England (Pelican History of England)*, Harmondsworth, 1950——Laslett, 1st ed., p. 153, note 171.
- (55) ロバート・ハムリン「ロバート・ハムリンの生誕二百年を記念して」

【付記】 本稿は一九八七年度立教大学で開講された大学院合同講義「史学史」の中で、松浦が分担したうちの最終回（一九八八年一月一九日）講義原稿を論文形式に補整したものである。（一九八九年一月七日記）
（立教大学名誉教授、フェリス女学院大学教授）